

能く肥え居たればハダカで寫す。寫真がすみ、一寸母が、油斷なし居るまに、「ウンコ」を澤山して其汚れた處を切に手でかきまはして居たには、閉口した。

一週間の献立

某 夕 女

- 日 鯛鹽焼 晝
 - 月 にまめ ほろ／＼につけ
 - 火 せんまい、あげ、(にしめ) ビフステーキ
 - 水 くわいに、んどん、(にしめ) ねぎま
 - 木 はせこぶまさと とろ／＼汁
 - 金 はす さしみ
 - 土 さとらみ 牡蠣フライ
- 朝は味噌汁と香の物だけなり



小笠原父島の二見港

や て

東京を南に距る海路五百三十哩ばかりの海中に一島がある、即ち小笠原群島の父島なり。此の群島は北緯廿六度卅二分に始まつて廿七度四十三分に終り、東經百四十二度五分から同十六度にわたり、大小九十有七の島嶼相連つて、南北に擴つて居るが、其の面積は全体を合算して、僅かに五方里餘に過ぎないのである。其の住民は千〇十六、四、千六百九十三人である。

此の群島の主なものは父島と母島とで、大さから云へば母島は第一であるが、現在開化の程度や未來有望の点から申せば、父島は確に第一に位するのである。其の理由としては唯父島には此の二見港があるからである。遠く文祿の昔に小笠原貞頼が發見して以來、外民が渡來したのも、八丈島民を移住せしめたのも、皆此の港邊であつた。嘉永六年に米國使節ベルリも、此の港に來り島内を檢案し碇泊地として、當時移住して居つた米人から購つた清瀨の地は、今に尙其の面影を此の港邊に存して居る。今日も横濱を解纜して小笠原群島に至る五百餘海里の長い航海中で、船舶の避難する場所は、房州の館山港を除いては、唯此の二見港ばかりである。大島にも八丈島にも鳥島にも港らしき所は一もないのである。實に南海中唯一の

港である。

四周は山を以て殆んど圓環の如くに取圍まれ、東西廿町南北十町ばかりの大灣で、水は深く最深は廿四五尋、碇泊の箇所多く、一時に十數隻の大船を容るゝ事が出来るのである。港口は西方の一部の開けて居る所で、其の口には小島が横つて居るから、西風も防ぐ事が出来る、故に港内は極めて靜穩である。港の奥の方に二つの岩が並んで居るが、其の形は丁度伊勢の二見石に似て居るから二見岩と云つて居る。此の港の名稱も之に基くのであらふ。

四邊の峰巒には熱帶特有の紅土燃えんばかりに奇麗な色をなし、椰子樹は亭々として聳え、香蕉は婆娑として海風に繚り、海水洋々紺青色をなして、漣波靜かに送るの邊、歸化人の少女は輕装を

して巧みにカノー船を操つて居る有様は、凡て目新らしくて、宛然南洋諸島か布哇にでも来たかと思はれたのであつた。

實に此の港は本島での良港たるばかりでなく、我國有數の港といふべきである、小笠原群島の南海に重きをなす所以は唯此の港の御蔭である。若し此の港がなければ、内地との交通も不便であり、船舶の寄港も絶え、人民の移住も辭く、開墾の利益もなく、到底今日の如き發達を見る事は出来ないのである。誠に此の港は小笠原群島の生命であり、又我國の南關として、日本民族が南方發展の兵站主地とすべき所である。かく考へて見れば二見港の功徳は千萬無量である、彼のナイル河が埃及文明に關係した事、ミシッピ河が米國致富の大原因である事は、能く人の云ふ所であるが、二見

港の小笠原島に於けるも亦之と同しである。將來此の港を利用して、我國の幸福を増進するには如何にすべきかは、最も興味あり最も必要なる問題である。

自分は此の島に旅行する前は、大洋中に基布して居る小島の事であるから、住民は皆海岸に居る漁夫で、漁船は到る處に澤山あり、節面白さ欸乃の聲は遙かに聞えて、純然たる漁村の光景を呈して居るだるふと想像したのであつた。否自分ばかりでなく誰しも同感だらふと思ふ。然るに事實は全く之と反對で、漁村ではなくて皆農村である、冒險的の漁夫でなくて平和なる農夫である、島内到處開墾せられて今や餘地はないのである。而して其の沿岸には僅少の小舟とカノー船とがあるばかりで、漁夫も漁船も殆んど見當らないと云つ

でも差支ない、まして欸乃も聞えず、漁火も見えないのである。一夜友人と海岸に歩みて港内の夜景を見渡した事があつたが、此の廣き港内は暗に閉ざされて、碇泊中の兵庫丸（自分等の乗つていつた船）と的矢丸（南鳥嶋の事業家水谷新六氏持船）との船燈が、漸く宵の明星の如くに輝いて居るばかり、四方寂寞にして、何物も其の幽靜を破ぶるものがなかつた。二見港邊に於てすら此の如くである、其の他の島に於ての様子は想像するにあまりあるのである。此の太平洋中の孤島に於てかゝる有様は喜ぶべきであらうか。

今や小笠原群島には、甘蔗は野に徧ねくして、其の産額は殆んど九万圓、鳳梨樹は山に満ちて其の額四千六百圓、庭園を飾る香蕉は九千五百圓、海風に櫛る林投樹は其の葉の編物は一万二千二百

圓。其の他に甜橙あり、櫻欄あり、檸檬あり、マニラあつて、共に幾分の産額はあるが實に僅かである。思ふに小笠原群島の價値は此等の産出地たる故でない、唯茫々たる大洋の中心に位置して、遠洋漁業のステーションたるにあるのである、南洋經營の根據地たるにあるのである。尙換言すれば幾十の群島其のものにあるのでなくて、此の四方山に圍まれて水深く浪靜に、船舶の休養に適當なる二見港の存在にあるのである。然るに此の港の現在は前述の通りである。

自分は彼の島へ旅行の時に、横濱から彼の島に居る歸化人と同船したが、其の話を聞けば彼等は臘虎船に雇はれて北海に行つた歸途であつたのである。此の港へは我金華山沖から北は千島、堪察加半島の沿海を徘徊して、鯨や臘虎の密獵をなす

船舶が、薪炭や飲料や蔬菜の買入をしたり、又獵夫の雇入れの爲めに、年々來るものが十數隻もある、此の歸化人等も毎年雇はれて行くのであるが、其の中の一人なるローベエ氏の如きは、餘程の貯蓄もあつて、小學校の基本金も主に此人の寄附金から成つて居るといふ事であつた。

遠い北米から大洋を航して同港に寄泊し、同島の歸化人を雇入れて漁獵に従事し、唯だ其の鯨油をとるのみでさへ、尙ほ夥多の利益があるのであるから、若し邦人が同島を根據として、此等の歸化人を案内にして、事を始めたらば、利益が更に多い事は理の當然である。事業勃興し漁船は朝に二見港を出で、夕に二見港に歸り、捕獲せし鯨類は此處で解剖し、採油し、罐詰にする様にならば、今や耕作の餘地なく、衣食に困しむ島民も、新な

る職業を得て、港邊を繞る各村落も、大に其の面目を改むるのであると思ふ。近時二三の有志者に見る所あつて、一の捕鯨會社創立を企て、居ると聞いたが、どうか一日も早く成立させたいものである。

港邊には西北に大村あり、東北に奥村、東南に扇村があつて、小笠原群島の粹は此の港邊に萃まつて居るのである。

(つゞく)

動ぎなき御代の光はてり渡る

萬頃一碧太平の洋

(牧羊)